

# 近世山間地域における環境利用と村落 信濃国秋山の生活世界から

白水 智

Use of the Environment and Villages in Mountainous Regions during the Early Modern Period

はじめに

- ①頑愚な百姓たち
- ②秋山の生業と生活
- ③「生活文化体系」の視点から
- ④根幹的志向としての「自律」

おわりに

## 【語文解説】

日本史分野では、個々の村落の環境や生業・生活への充分な目配りを経ないままに、村落一般を指して「農村」と呼び習わす傾向がある。しかし、こうした安易な村落類型の呼称は、与えられた環境を生かす多様な技能・知識を磨き、生活を成り立たせてきた在地の生活や社会の特性を覆い隠してしまう点で大きな問題がある。

本稿では、信濃国の山村秋山を対象に、平地に住む名主と山地住民との間に生じた生活認識に関する齟齬を、「生活文化体系」という視座から捉え直してみた。これは、衣食住を始め生業や信仰等に関わるある地域の諸事象を、当該地域で生きるための総体的な生活知・技能の体系と見る考え方であり、各村落の特性を追究する際には有効な視点といえる。本稿では秋山の生業面を主に追究し、産業的大規模なものより、日常的小規模かつ恒久的な環境利用を住民が望んでいることを明らかにした。

また、名主からの救済を、時により受け入れたり拒否したりする秋山住民のあり方

について、その背後に基本的觀念としての「自律」意識が横たわっていることを指摘した。そして、この意識が、山地なりの「生活文化体系」になじまない名主の救済案を拒否させる大きな要因であると考えた。従来村落の行動原理を理解するにあたって、「自立」と「自律」とが混同されてきたが、この点を明確に区別することによって、前近代における「自力救済」の世界も理解しやすくなるように思う。